九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

田村俊子の文学作品における女性像の形成と変遷

蘭, 蘭

https://doi.org/10.15017/1470509

出版情報：九州大学, 2014, 博士（比較社会文化）, 課程博士
バージョン：
権利関係：全文ファイル公表済

氏　　名　：　蘭　蘭

論文題名　：　田村俊子の文学作品における女性像の形成と変遷

論　文　内　容　の　要　旨

明治・大正・昭和の三代にわたる田村俊子の文学作品には、性に目覚める少女、ハイカラな女学生、女性作家や女優として自分の人生を切り開こうとする女性、社会主義の運動に奔走する若い娘など、さまざまな女性たちが登場する。これらの女性人物像はいずれも、ジェンダーの観点から論じるのに格好の材料を提供しており、従来、それぞれの作品について、多くの論考が書かれてきた。しかし、田村の作品全体を視野に入れて、田村の女性の描き方の特色、あるいは特色の変化を総合的に解明しようとする試みは、これまでほとんどなされていなかったように思われる。本論はまさにそうした試みを目的としている。

本論文は二部構成になっている。第一部では、田村の作品群全体を視野に入れて、女性像が、作品のテーマや時代の流れ、あるいは田村自身の考え方の変化に応じてどのように変化しているか、という点に重点を置いて考察する。第二部では、モチーフの観点からの考察、及び、他の作家からの影響関係についての考察を行なう。

序章では、先行研究をまとめ、従来論じてられていない問題点及び先行研究の不備を指摘し、本研究の目的、研究対象、研究方法などを提示する。

第一部第一章では、「匂ひ」、「離魂」、「枸杞の実の誘惑」、「あきらめ」を取り上げて、少女像の変化を検討する。

第二章第一節では、恋愛と結婚に苦闘する女たちの描かれ方について考察し、田村の「新しい女」像がどのように形成されていったかという問題を考える上での一助とする。

第二節では、四編の女優の物語を取り上げて考察する。

第三節では、シスターフッド、レズビアン・ラブ、バイセクシュアリティなどの表現について考察し、主人公たちの倒錯的恋愛を通して表現しようとしたことを究明する。

第三章では、北米を舞台とする作品における女性の描かれ方について考察する。十八年間カナダの日本人移民社会で生活し、人間としての権利を獲得するために闘った移民労働者の同志であることを自認していた田村は、官能の享楽や頽廃、男女の葛藤や相克などをテーマにした小説を書くことから、社会性、思想性を持つ作品を創作することへ転換していった。移民地を舞台とする小説「小さき歩み」三部作と「カリホルニア物語」を取り上げる。

第二部第一章第一節では、日本近代文学における肺結核文学の嚆矢とされる広津柳浪の「残菊」、徳富蘆花の「不如帰」などとも対比しながら、田村の女性主人公の肺病死の意味を検討する。

第二節では、近松門左衛門の「心中天の網島」と比較し、田村の女性主人公の自死の意味を検討する。

第三節では、井原西鶴の「好色五人女」を髣髴させる田村の「お七吉三」を取り上げて、両作中の放火する二人の少女の死の意味合いを考察する。

第二章第一節では、嗅覚描写についての特徴を考察し、同時代の自然主義文学の典型と考えられる田山花袋の「蒲団」における「匂い」の表現との関係についても論じる。

第二節では、イプセンの「人形の家」を取り上げ、「誓言」と比較し、二人のヒロインたちが家を

出て行くまでの経緯の異同を考察する。

第三節では、「圧迫」を取り上げて、「都会の底」に生きる女性のセクシュアリティと職業労働についての描写と、秋声の作品、特に「あらくれ」との共通点及び相違点を考察する。

以上のような考察の結果として、結論として次のようなことが言えよう。田村の女性の描き方の特色として、まず初期の作品における少女の生々しい性的意識に関わる描写が注目される。このような描写を含むテーマ設定は、田村が、続く時期にいわゆる新しい女を描くことと無関係ではない。つまり、新しい女の出現は、男中心の社会で性的にも受動的であることを強いられていたことへの抗議や反抗の側面を持っているのではないかということである。田村の描く新しい女が職業に就き、経済的に自立しようとするだけでなく、性的にも積極的に行動し、女性同士の同性愛などにも逸脱していくのは、そのためであろう。しかしながら、田村が到達点としてそうした新しい女を描くだけでとどまっていたのなら、田村の文学は全体としてそれほど際立ったものとはいえないかもしれない。田村は後期に社会主義などの運動に関わる女性を描くようになる。ここにいたって、主人公の関心は自己の生活の独立といった個人的なものから社会的なものへと変化している。田村の女の描き方の変遷を辿る、という本論文の問題設定によって、新しい女を描く作家、というおおまかなレッテルでくくられがちな田村が、変化する作家であったことを明らかにすることができたのではないかと考えられる。